

安達瞳子さんの急逝を悼む

箱田 直紀(園芸文化研究所長)

2004年度から恵泉女学園大学の客員教授をお願いしていた、花芸安達流主宰の安達瞳子さんが、急性肝不全のため3月10日に亡くなられた。最近のご体調も比較的良好と伺っていただけに、突然の訃報に絶句された方々が多かったと思う。

安達瞳子さんは1936年に安達式插花家元・安達潮花氏の娘として東京都に生まれ、1973年には「花芸安達流」を創流。全国に5万人の会員を擁する流派の主宰として「花芸展」「花手前」の開催や海外への文化使節、国や地域の各種委員など多方面に活躍中であった。

恵泉女学園との関わりは、直接的には大学の園芸カリキュラムの中で「園芸芸術論」の講義を担当していただいていた。

ところで、恵泉女学園の園芸教育は欧米の文化や美意識を基盤とし、それらの文化を日本に定着させる過程で重要な役割を果たしてきた。したがって、「花卉装飾」教育に関していえば、日本の「生け花」からはでなくて、いわゆる「フラワー・アレンジメント」の基本を学ぶことから始まる。

かつての短期大学の2年間では教育期間という物理的な制約もあってここまでの範囲で一応完結する。しかし、これからの大学での4年間の園芸教育を考えたとき、私たちはもう一段上の贅沢を考えた。瞳子先生の言葉を借りれば「西欧の文化に基盤を置く恵泉の園芸教育を受けた学生さんに、



もう一度日本古来の文化や芸術を意識してもらいたい。」ということである。瞳子さんをお願いした理由には、恵泉園芸への理解を基盤に日本の文化の真髄を伝達していただけると考えたことにある。

実は、2003年秋に客員教授をお願いするにあたり、当時の石井摩耶子学長とお宅に伺ったときにはじめて知ったのであるが、恵泉園芸短大の課外授業「生け花」の指導は、瞳子さんのご尊父・安達式初代家元・安達潮花氏の門弟の方が担当し、さらに経堂の恵泉女学園中学・高校の課外授業の「生け花」も安達流の先生だということがわかった。改めて恵泉女学園と花芸安達流との歴史的な協力関係を認識させられた。

ところで、大学の講義「園芸芸術論」の日本の「生け花」に関する部分の今後であるが、大学改組後の昨年度から始まった新カリキュラムでは、すでに花芸安達流の後継者である安達育さん(現副主宰)に担当していただくことに決まっている。いつもながら先を読んだ瞳子さんのご配慮に頭が下がる。

最後に、改めてご冥福をお祈りいたします。